

日本語教育用リソース検索 Web サイト 「Classroom Resources」の開発

—オーストラリアの初中等教育におけるシドニー日本文化センターの日本語教育支援—

大知春華・キャシー ジョナック・金孝卿

〔キーワード〕 Web サイトの開発、日本語教育用リソース、オーストラリア、初中等教育、教師支援

〔要 旨〕

国際交流基金シドニー日本文化センターは1991年設立以来、オーストラリアの日本語教師を対象に日本語教育に関する最新情報や教室で使える教材やリソースなどを配信してきた。これまで作成した教材やリソースは2009年から当センターのホームページ上に掲載されていたが、開発した教材が作成年順に並べられているだけのものであった。そこで、当センターが作成してきた日本語教育用リソースをより効率的に検索できる Web サイト「Classroom Resources」(<http://jpfsyd-classroomresources.com/>)を開発し、2014年4月に公開した。本稿では、当 Web サイト開発の企画、実施の背景を明らかにし、Web サイトの機能と特徴、公開後の反響を報告する。

1. はじめに

本稿では、国際交流基金シドニー日本文化センター（以下、JF シドニー）が2012年から約2年間にわたって行った「Classroom Resources」(<http://jpfsyd-classroomresources.com/>) 開発プロジェクトについて報告する。「Classroom Resources」とは、JF シドニーが作成した日本語教育用リソース（以下、リソース）を、オーストラリアの初中等教育機関で教える日本語教師（以下、現地教師）に効果的に提供することをめざし開発した、検索機能を備えた Web サイトである。JF シドニーは、1991年に設立されて以来、多方面からオーストラリアの初中等教育における日本語教育支援を行ってきた。中でも教材開発は、JF シドニーが特に力を入れて行ってきた支援の1つである。作成した教材は、紙媒体のニューズレターを始め、クラス活動リソース集冊子、オンラインによるニューズレターで配信し、2009年からは JF シドニーのホームページ上でも公開してきた。しかし、ホームページ上における掲載の仕方や検索方法が非効率的であり、現地教師がリソースを手早く入手できる状態ではなかった。

このような背景から、現地教師が自ら必要なリソースを手軽に検索できるように「Classroom Resources」を構築し、2014年4月に一般公開に至った。本稿では当 Web サイト開発の企画、実施の背景を明らかにし、Web サイトの機能と特徴、公開後の反響を報告する。

2. 「Classroom Resources」開発の経緯

2.1 オーストラリアの初中等教育事情

国際交流基金（2013）によると、日本語学習者数が世界第4位を誇るオーストラリアでは、約30万人が日本語を学んでおり、そのうち96%が初中等教育機関における学習者である。オーストラリアでは1980年代後半、多文化主義のもと、学校教育における外国語教育を重視し、政府はLOTE（Language other than English）政策を打ち出した。その際、日本語はLOTEにおける9つの優先学習言語として選ばれた。さらに、オーストラリア政府がアジアとの経済的な関わりを重視し始めたことにより、日本語を含めた4つのアジア言語⁽¹⁾を優先学習言語とする政策NALSAS（The National Asian Languages and Studies in Australian School）も打ち出され、このころ日本語学習者数は急速に増加した。80年代から2000年前半にかけてのオーストラリアの日本語教育事情について、詳しくはジョナック他（2008）を参照されたい。政権交代によりNALSASは予定より4年早い2002年に終了となり、学習者数は一時的に減少するが、2000年代後半からはNALSASの後継プロジェクトであるNALSSP（National Asian Languages and Studies in Schools Program）が実施され、日本語教育は継続的に支援を受けた。2012年以降はNALSSPの終了とともに、各州の教師研修や教材開発に関わる動きが鈍くなったものの、2012年10月には「アジアの世紀におけるオーストラリア白書」（Australia in Asian Century）が発表される⁽²⁾など、一連に関する外国語教育の政策は脈々と受け継がれてきている。このようにオーストラリアでは、現在もアジア言語を重要視する傾向は続いており、その中でも日本語はオーストラリア国内において最も学ばれている外国語として重要な位置を占めている。オーストラリアの初中等教育における教育政策と日本語教育の現状について、詳しくは国際交流基金「日本語教育国・地域別情報＜オーストラリア＞」（<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2013/australia.html>）を参照されたい。

2.2 JF シドニーが開発した初中等教育向けの日本語教材

本節では、JF シドニーが行ってきた初中等教育支援事業のうち、教材開発について述べる。表1は、オーストラリアの初中等教育における教育政策や日本語教育に関わる主な動向、現地の状況や教師からのニーズに応じて、JF シドニーが作成した主な教材やリソースを年代順に挙げたものである。現地の状況やニーズは、JF シドニーが設立してから約20年の間に打ち出された主な教育政策とともに変化を遂げてきた。

表1 JF シドニー作成の主な日本語教材とリソース

年	現地の状況、ニーズ	教材の種類と『教材名』	教育の政策と動向
90年代 前半	教科書の不足 コミュニケーション アプローチ	Flash Cards、アクティビ ティ活動集、ゲーム、ロール プレイ、 インフォメーショ ンギャップ	・ LOTE に関する政策、「All ガイド ライン」の発表（1987） ・ 「ALL ガイドライン」に基づいた 各州によるシラバス、カリキュラム の策定（1994）
90年代 後半	教授法 学習ストラテジー	ティーチャートーク、 Differentiated Learning 内容重視の日本語教育（他 教科の内容を含んだ学習）	
2000年代 前半	オーセンティックな 素材、教材、タスク	マンガ、日本の昔話 日本旅行のトピック	・ National Statement for Language Edu- cation in Australian Schools （2005－2008） ・ 「The Shape of the Australian Cur- riculum」 Australian Curriculum（2009） オーストラリアンカリキュラムの枠 組み発表
2000年代 後半	ILL の理念に基づいた 教材	『Art Speaks Japanese 』 （日本の美術品と日本語を 統合して学習）、日本映画 『 Happy Family Plan 』を用 いた教材	
2010年代 以降	マルチメディア、生徒 の創造性の向上	『Video Production in the classroom 』『IWB リソース コンビニすごろく』	・ 日本語のカリキュラム完成予定 （2014）

90年代前半は、中等教育向けの日本語の教科書^③『Kimono』（CIS Educational）が発行されたものの、教科書の学習内容を膨らませる副教材と呼べるものが不足しており、JF シドニーでは、語彙カードや絵カードなどの教具や文型を覚えるためのゲーム、アクティビティなど、現場ですぐに使える教材をできるだけ多く提供していた。

90年代後半になると、『Obento』（Cengage Learning Australia）、『Ima!』（CIS Heinemann）、『Mirai』（Longman Australia）等、中等教育向けの教科書が次々と刊行された。これらの教科書は写真や漫画などが取り入れられ、文化と一緒に言語を学べることを目的とした質の高いものであり、改訂を繰り返しながら現在でも多くの学校で使用されている。この時期 JF シドニーが開発した教材やリソースは、現場で起きている問題に着目されたものであった。現場で起きた問題の1つに、日本語学習の開始時期が異なる学生が同一クラスに混在していたことがある。オーストラリアでは第2外国語を導入する時期について、州ごとに規範はあるものの、詳細は学校長の裁量に任せられており、初等教育段階から日本語を導入している学校と、中等教育段階から日本語を導入している学校があるためである。このような現状に配慮し、JF シドニーでは、言語知識のレベルに頼らず、言語以外の知識や認知能力も生かせるような教材を作成した。例えば、他教科の内容と統合して日本語を学習する内容重視の教材や、論理的思考を必要とする問題解決のための教材である。また、教室用語を日本語で導入するリソースも提供

した。

2000年代に入ると、オーセンティックな素材や教材が求められるようになった。したがって、日本旅行をテーマとした教材などにオーセンティックな情報を取り入れ、日本語の学習によって未だ訪れたことのない日本を身近に感じられるような教材を作成した。マンガや日本の昔話を使って日本語を学べる教材も作成した。

2000年代半ばには、ILL (Intercultural Language Learning) と呼ばれる外国語教育に関するスタンスが注目されるようになった。Liddicoat (2003) では、ILL による学習のねらいを以下の3つとしている。

- ① すべての文化、すべての言語を尊重する。
- ② 異文化間において自己調整することの価値を見出す。
- ③ 異文化間において自己の感受性を養う。

2005年に発表された国家声明書「National Statement for Language Education in Australian Schools –National Plan for Language Education in Australian Schools2005–2008」では、外国語教育の質や内容についての考え方が示され、学校教育において ILL の考え方が推奨された。ILL という外国語教育に対する大きな流れを踏まえて、JF シドニーはニューサウスウェルズ州立美術館と協力し、リソース型日本語教材『Art Speaks Japanese』(Art Gallery of NSW and The Japan Foundation, 2007) を開発した。日本の美術品が16種類取り上げられ、その写真とともに ILL のアプローチを使って小学生から高校生までが日本の美術を通じて言語と文化を学べるタスクシートが添えられている。また、2008年には、日本映画『しあわせ家族計画』(英語名: Happy Family Plan) の映画を教材化した (<http://www.happyfamilyplan.com/>)。1999年松竹支給の既存の映画を用いながら、ILL に基づいた活動を盛り込んだ教材である (岸田他2012)。なお、ILL の理念は現在の外国語教育においても基盤となっている。

2009年には、21世紀に向けての教育改革として、オーストラリアンカリキュラムの枠組み「The Shape of the Australian Curriculum」が発表⁽⁴⁾された。この枠組みには、全教科で培うべき7つの能力 (General Capability) が以下のように記載されている。

- ・リテラシーに関する知識・技能・理解 (Literacy)
- ・算数、数学に関する知識・技能・理解 (Numeracy)
- ・ICTに関する技能・理解 (Information and communication technology capability)
- ・思考スキル、創造性 (Critical and creative thinking)
- ・社会的能力、自律学習、チームワーク (Personal and social capability)
- ・倫理的なふるまい (Ethical understanding)
- ・異文化・文化間理解 (Intercultural understanding)

2010年以降、オーストラリア国内において ICT を活用した教室活動が推奨されるようにな

った。この時期 JF シドニーでは、オーストラリアの教育機関に IWB (Interactive Whiteboard) が導入されたことを受け、2011年に『IWB リソースコンビニすごろく』(www.jpfr.org.au/iwb/index.html)を開発した。

2014年現在、オーストラリアンカリキュラムの枠組みをもとに、各教科のカリキュラムが作成されている。各教科のカリキュラムには、学年別に、学習目的や学習内容、評価基準が明確に記されている。まずは、主要5科目(英語、数学、理科、歴史、地理)が完成した。言語のカリキュラムについては、中国語、フランス語、インドネシア語、イタリア語の4ヵ国語が既に完成している。日本語のカリキュラムも、他6ヵ国語のカリキュラムとともに作成中^⑤であり、完成が待たれている。全教科において、オーストラリアンカリキュラムに基づいた教育支援が行われている中、JF シドニーにおいても、上記に挙げた7つの能力の向上を意識しながら、日本語教材の開発を進めている。

2.3 開発した日本語教材の配信と掲載に関わる問題

前節で示した通り、JF シドニーでは現地の状況やニーズに応じて、多種多様な教材を開発してきた。上記の教材はこれまでも JF シドニーのホームページ上に掲載し、一般に公開していた。しかし、非効率的な掲載方法であり、必要な教材を手早く探せず、実際にホームページを見ても必要な教材が探せないという現地教師からの問い合わせも少なくなかった。

非効率的な掲載方法とは、90年代から紙媒体で発信していた教材を、当時のタイトルのまま作成年順にオンライン化して掲載していた点である。この掲載方法では、現地教師にとって JF シドニーが作成した教材を探しにくいだけでなく、JF シドニーにとっても教材管理を徹底しにくいという問題点があった。さらに、2.2に挙げた教材以外にも、教師研修用に作成された教材やリソースが多数あり、それらを含め、JF シドニーが作成してきた教材やリソースを1つにまとめて発信するサイトの必要性が出てきたのである。

3. 「Classroom Resources」開発プロジェクト作業

こうして、多忙な現地教師が欲しい教材を手早く的確に見つけられるサイト、全ての教材において一定の質が保たれているサイト、以上の2つをサイトのコンセプトとし、「Classroom Resources」開発プロジェクトが立ち上げられた。開発作業の日程は次ページ表2の通りである。

プロジェクトは2012年第2四半期に企画原案の策定がされ、Web サイト制作会社を選定した。結果、Web デザイナーである角南北斗氏に Web サイト構築業務を委託することとした。角南氏とは Web サイトのコンセプトを共有した上で、実装に関わる主に技術面のアドバイスをもらうなど、やりとりを繰り返しながら Web サイトの完成に至った。この際、JF シドニーの講師が自由に編集できる Web サイトにするよう依頼した。誤植の書き換えや、リンクの確

表2 「Classroom Resources」 開発プロジェクト作業日程

開発1期 ⁽⁶⁾	2012年第2 四半期 (7月～9月) 2012年第3 四半期 (10月～12月) 2012年第4 四半期 (1月～3月)	プロジェクト企画書の提出 Web サイト制作会社の選出、決定 教材の仕分け作業 教材誤植の書き換え、リンク・著作権の確認 教材紹介文の作成 検索用タグの決定
開発2期	2013年第3 四半期 (7月～9月) 2013年第4 四半期 (10月～12月) 2014年第1 四半期 (1月～3月) 2014年第2 四半期 (4月)	トップページ、ナビゲーションの決定 教材編集作業 仮完成後内部モニタリング 一般公開

認をこまめに行い、常に一定の質が保たれた教材が掲載されているよう管理するためである。

2012年第3 四半期、第4 四半期は、過去に開発した教材の誤植や表示されているリンクの有無を確認し、書き換え作業にあたった。また、分類された教材の一つ一つに紹介文を作成し、検索用タグ⁽⁷⁾をつけた。教材紹介文の作成、検索用タグの決定には、現地教師の意見を反映させたいと考え、2012年の第4 四半期に、Web サイト構築のアシスタントとして週2回 JF シドニーで作業することが可能な現地教師を1名採用した。

2013年第3 四半期に入ってから、トップページのデザインと検索のナビゲーションの決定に着手した。また、仕分けした教材をサイト上に入力し、2013年第4 四半期には仮完成に至った。仮完成後は、使用しているパソコンやタブレット、プロバイダとの相性、ページのレイアウト、掲載されている教材の中身、以上3つを軸にアンケート用紙を作成し、JF シドニー内でモニタリングチェックを行った。アンケートの回答を踏まえ、微修正し、2014年第2 四半期に一般公開した。

4. 「Classroom Resources」の機能と特徴

「Classroom Resources」を構築した最たる目的は、オーストラリアの初中等教育で日本語を教える日本語教師に、各自必要なリソースを手軽に素早く探してもらうことである。したがって、Web サイトに表示される言語はすべて英語とし、PC だけではなくタブレットやスマートフォンからも閲覧できるようにシステムを構築した。システム構築するにあたり、特に工夫した3点、(1) トップページ、(2) リソースの検索方法、(3) 教材、リソースのダウンロードについて、以下に述べる。

4.1 トップページ

トップページでは、オーストラリアの日本語教育の文脈に即した Web サイトであることを強調するため、初中等教育対象の教材やリソースが入っていることを前面に押し出した。具体的には、対象学年レベル⁽⁸⁾ごとに3つのサンプルリソースを掲載した。そして、現地教師が必要なリソースを手早く探せるように、クリックしなくても教材やリソースの概要を閲覧できるよう工夫した。下の図1は、Web サイトのトップページ例である。

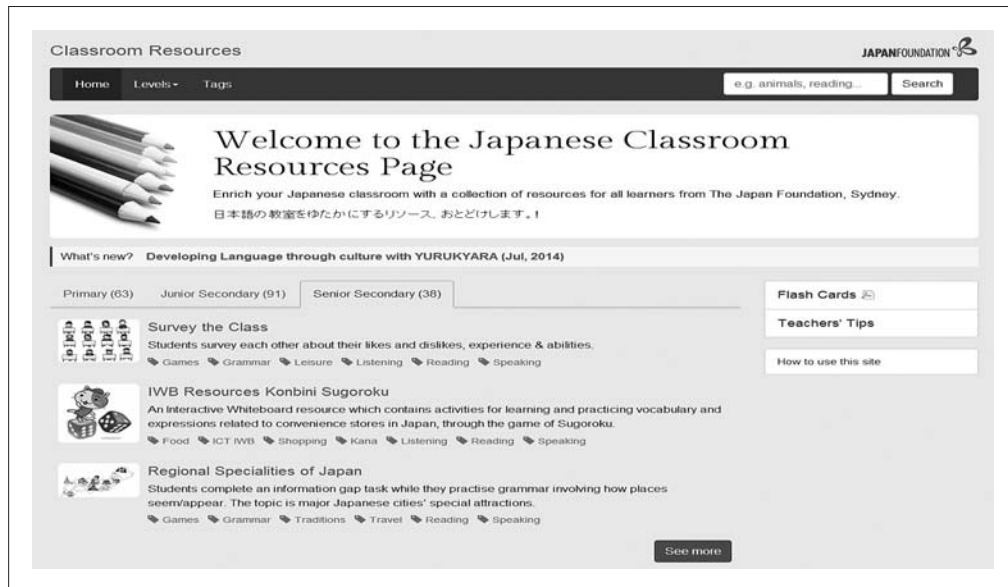


図1 「Classroom Resources」のトップページ例

図1のトップページ例では、Senior Secondary レベルに該当する3つのサンプルリソースが掲載されている。サンプルリソースをトップページ内で表示切替し、一度に見ることができるように、各対象学年レベル（Primary, Junior Secondary, Senior Secondary）のタブも設けた。表示されるサンプルリソースはランダムに更新される。対象学年の横にはリソースの数を括弧書きで記載し、豊富なりソースが入っていると感じさせるようなトップページになるようにも工夫した。2014年8月現在、Primary (63)、Junior Secondary (91)、Senior Secondary (38) のリソースが Web サイトから閲覧可能である。リソースによっては、複数の対象学年レベルに重複して入っているものもある。以下、具体的なリソースを例に取り上げて説明する。例えば、「Video Production in the classroom (<http://jpfsyd-classroomresources.com/r111.html>)」は教室活動にビデオ制作を取り入れるための5つのステップの他、日本語の教室でビデオ制作活動を行う意義や、いいビデオを制作するためのヒントを紹介している。JF シドニーでは、2009年からビデオまつり (<http://video-matsuri.jpf-sydney.net/>) を年に1度開催しており、Primary, Junior

Secondary, Senior Secondary, Tertiary の4部門に分けて審査を行っている。したがって、「Video Production in the classroom」のリソースは、学年レベルの括りを越えて活用できると考え、どの学年から検索してもヒットするように構築している。また、第2章にも記述した通り、オーストラリアでは日本語教育の開始時期が州によって、あるいは学校によって異なる。対象学年ごとに学習項目を積み上げるわけではないため、同一の教材が複数の対象学年で使える可能性がある。

そして、想定するユーザーは初中等教育機関の現地教師ということもあり、トップページは親しみやすいポップなイメージになるよう心掛けた。Webサイトのシンボルともいえる色鉛筆は、アクティブな教室活動を喚起させるものである。また、一つ一つのリソースの内容やイメージに沿うようなサムネイル画像を置き、リソースの詳細を読みたくなるようなページに仕上げた。

そのほか、教材やリソースとは別に、「Flash Cards」「Teachers' Tips」のカテゴリーを設けた。「Flash Cards」には語彙カードや絵カードが入っている。これらのカードをPDF化し、性質ごとに区分して、手早くダウンロードできるようにした。「Teachers' Tips」には、教室用語の日本語をクラスで導入するためのリソースや、教室用語の絵カードが入っている。さらに、新着のリソースを表示した「What's new」のコーナーを設けることで、動態的なWebサイトに仕上げ、リピーターのユーザーを増やせるように努めた。初めてのユーザーやWebサイトの使い方がわからなくなった教師のために「How to use this site」のコーナーも設けている。

4.2 リソースの検索方法

現地教師は、いつどのような場面でリソースを検索したいと思うだろうか。現地教師のニーズを想定し、下記に挙げた3つの方法でリソースを検索できるようにしたことは、「Classroom Resources」の最大の特徴である。

- (1) Primary, Junior Secondary, Senior Secondary の3つの学年レベルから探す方法
- (2) Speaking, Listening などの四技能やアクティビティの種類などのタグから探す方法
- (3) 探したいキーワードを直接入力して探す方法

4.2.1 学年レベルからの検索

1つ目は、学年レベルからリソースを検索する方法である。トップページでは、タブで切り替えることで各対象学年レベルのリソース例を閲覧できるが、もっと閲覧したい人向けにレベルごとのページに移動できるリンクを用意した。図2は、トップページから Primary を選択した場合の2ページ目である。ここでは、64件の Primary 向けのリソースが全て表示される。

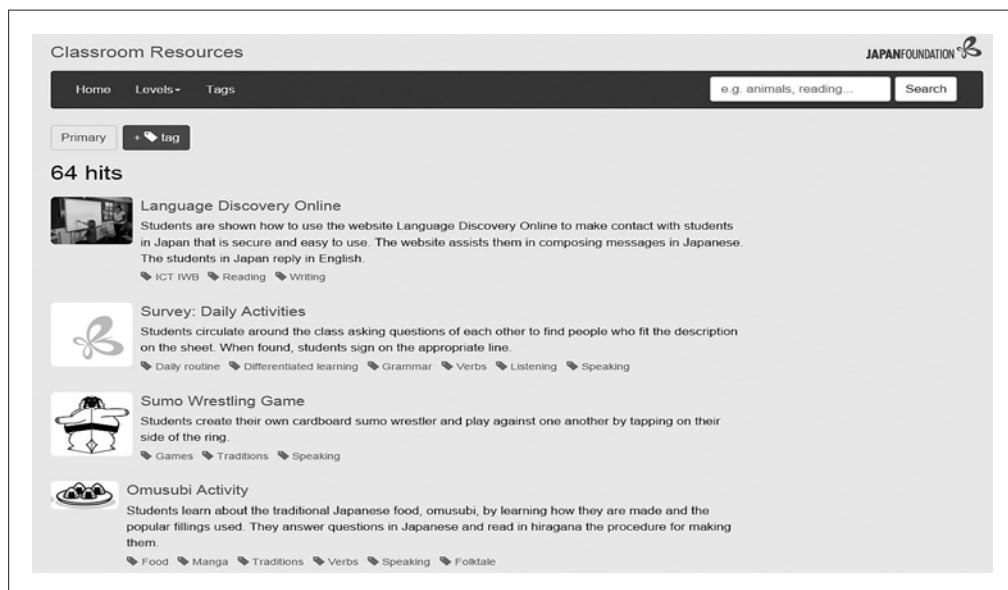


図2 「Primary」で検索した場合表示されるリソースの一覧

下段までスクロールするとページャーがついており、Primary 向けのリソースが1ページ当たり10件、一覧で閲覧できる。これが、学年レベルからの検索方法である。

4.2.2 タグからの検索

2つ目は、タグから検索する方法である。ツールバーの「Tags」ボタンからは、四技能やアクティビティの種類、トピックを示すタグが選択可能である。図3はツールバーの「Tags」をクリックした際に表示されるタグの一覧である。「Tags」ボタンをクリックすると、42のタグがアルファベット順に一覧で表示される。タグから検索できることは、「Classroom Resources」の大きな売りである。現地教師が欲しいリソースを手早く的確に見つけられるという Web サイトの目的を具現化する鍵となっている。

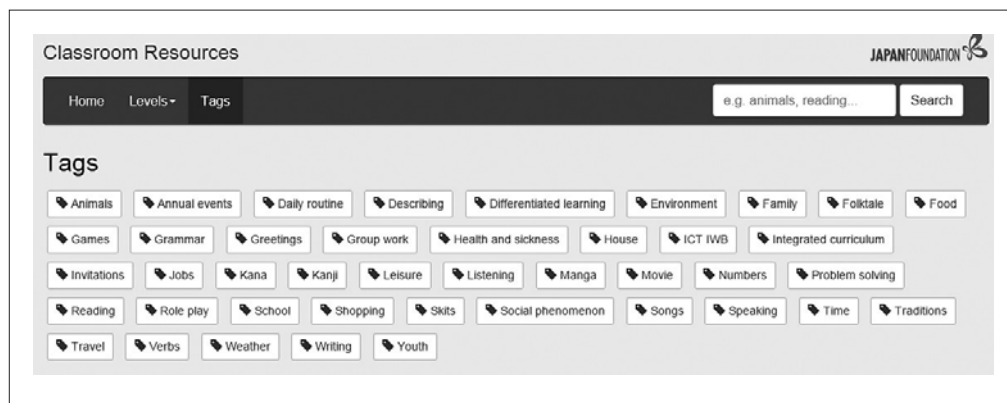


図3 タグ一覧

複数のタグや、対象学年とタグ機能を合わせて、リソースの件数を絞り込むことも可能である。例えば、図2で示した64件ある Primary 向けのリソースからゲームに関するリソースだけを絞り込みたい場合、＜+tag＞ボタンから「Games」を選択する。すると、図4のように表示が切り替わり、64件から21件までリソースを絞り込める。

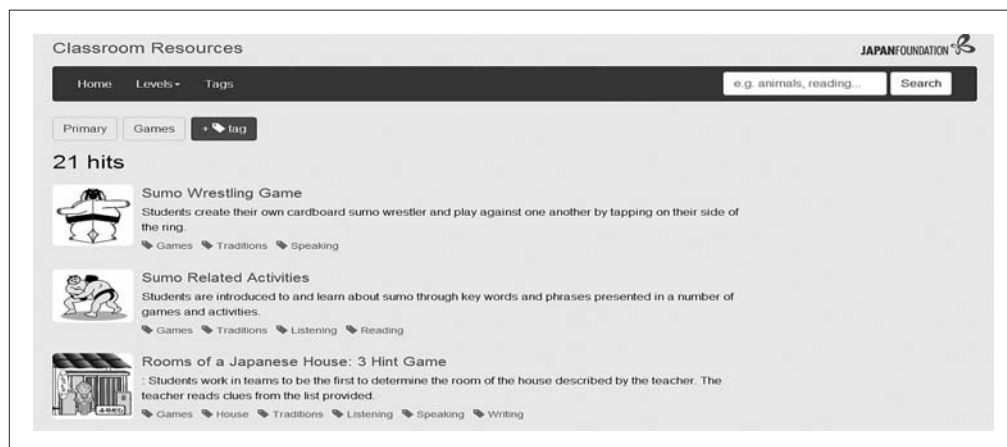


図4 「Primary」＋「Games」で検索した場合表示されるリソースの一覧

タグによる絞り込みは、＜+tag＞が表示されている限り行える。例えば、Primary 向けのゲームも、「Animals」に関するゲーム、「Kanji」に関するゲームというように、ゲームの種類までも絞り込める。

4.2.3 キーワードからの検索

3つ目は、キーワードから検索する方法である。一見、最も早く必要なリソースに当たれる

手段に思えるが、Web サイト内にある全ての文字が検索対象になってしまうため、予想とは異なるリソースがヒットしてしまうこともある。例えば、和太鼓に関するリソースを検索しようと思い、「taiko」と入力すると、おにぎりのリソースもヒットしてしまう。食べ物の「mentaiko」を読み取ってしまうためである。このように、必ずしも欲しいリソースを探す近道にはならないのであるが、欲しいリソースをピンポイントで検索できる可能性もある。

4.3 教材、リソースのダウンロード

タスクシートや、読み物などの教材は Word ファイル、または PDF ファイルでダウンロードできるようにした。

図5は「Manga : Taketori monogatari (<http://jpfsyd-classroomresources.com/r56.htm>)」のリソース中にある漫画のダウンロードページである。ユーザーは、授業の流れやアクティビティアイデア等の記事を読みながら、必要なタスクシートをダウンロードできる仕組みになっている。

また、以前ニュースレターで配信されていた教師向けの豆知識は「Additional Resources」として、関連する教材からダウンロードできるようにした。例えば、「Manga : Taketori monogatari」には、日本昔話に関する教師向けの豆知識が掲載されている。「Additional Resources」によって、掲載されている教材の背景や裏付けを知ることができる。また、同一テーマのリソースに同じ「Additional Resources」を掲載することにより、教材間の関連付けを行っている。



図5 教材ダウンロードページ例

5. 公開後の反響

「Classroom Resources」は2014年4月19日に公開された。まずは、JF シドニーが現地教師向けに月に一度発行しているニュースレター『J-Teacher』(www.jpf.org.au/jnewsletter/index.html)の5月号で広報した。また、2014年7月に行われた全豪日本語教育大会 (National Symposium on Japanese Language Education : NSJLE) において、ワークショップ形式の口頭発表 (Ochi et al, 2014) を行い、参加者各自の PC、タブレットやスマートフォンを用いて Web サイトの感触を掴んでもらった。その結果、アクセス数が増加し、その後リピーターを獲得することに成功している。NSJLE 発表後の会場内では、「タスクシートの作り方等教材作成に関する著作

権の情報が欲しい」「Senior 向けの教材がもっと欲しい」等、現地教師から直接ニーズを聞くことにも成功した。今後、充実した Web サイトにするためには、現地教師からの反応や提案を取り入れながら改善をするというように、現地教師と Web サイトを育てていくことが必要であろう。

表3 アクセスデータ

ページビュー	31,200
ユーザー数	2,050
1回のセッションに対する閲覧ページ数	9.24
アクセスのあった国	57

表3は、一般公開した2014年4月19日から8月20日時点の主なデータである。公開後4ヶ月という短い期間であるが、2,050名のユーザー数があつた。ユーザーは訪問一回につき、平均9ページ以上の閲覧をしていることが明らかになり、Web サイトの中

身をじっくりと見てもらっている様子が窺える。オーストラリアの文脈に合わせて構築した Web サイトではあるが、57ヶ国からのアクセスがあつたことは特筆すべき事項であろう。1位はオーストラリアで、ユーザーの7割以上を占めている。2位日本、3位アメリカ、4位イギリス、5位ブラジル、6位ニュージーランドと続く。Web サイトの使用言語は英語であることから、英語圏からのアクセスが多くなっていると推測される。継承語としての日本語学習者の多いブラジルからのアクセスも多い。オーストラリア国内でのアクセス状況は、1位はニューサウスウェルズ州、2位はクィーンズランド州、3位はビクトリア州となっている。JF シドニーの拠点があるニューサウスウェルズ州からのアクセスが国内の40%を占めている。各州の教師研修会において、ワークショップ形式で Web サイトを紹介し、ハンズオンで感触を確かめながら使いやすさを実感してもらうことが、Web サイトの活性化につながるだろう。2014年8月末には、タスマニア州の現代語教師研修会で「Classroom Resources」の制作発表を兼ねたワークショップ形式のセッションを行う予定である。研修会後の反響や Web サイト^⑨ アクセス数の変化に期待している。

6. 今後の課題

公開後の反響を踏まえながら、技術面と内容面に分けて、「Classroom Resources」Web サイトの今後の課題を以下に述べる。

6.1 技術面の課題

技術面の課題として、キーワード検索の精緻化が挙げられる。第4章でも述べた通り、Web サイト内にある全ての文字が検索対象になってしまうため、予想と異なるリソースがヒットしてしまうことが多くある。ユーザー行動を分析したところ、トップページを開いた最初の行動としてキーワード検索を行うユーザーが比較的多いことから、キーワード検索はニーズの高い検索機能であることが分かる。したがって、キーワード検索機能の改修は必須である。

6.2 内容面の課題

現在、オーストラリアンカリキュラムに基づく学習・教育支援のウェブサイト、環境整備が様々な教科において行われている。放送局による教科学習の支援サイト「ABC Splash」(<http://splash.abc.net.au/home>) では、Primary, Junior Secondary の対象学年別にリソースが配信されている。また、アジア教育財団 (<http://www.asiaeducation.edu.au/default.asp>) もオーストラリアンカリキュラムに合わせた教材やリソースをアーカイブで提供している。言語学習・教授支援サイト例としては、「Language Learning Space」(<http://www.lls.edu.au/>) があり、日本語版は2014年末に公開される予定である。

日本語教育では、ビクトリア州日本語教師会 (JLTAV) のタブレット用リソースや CLIL (Content and Language Integrated Learning) 用のリソース等が注目を集めている。これらのリソースは、第2章で述べたオーストラリアンカリキュラム、7つの General Capability の育成を実現するものとして注目されている。General Capability は全世界の教育機関で注目されている「21世紀スキル」のオーストラリア版とも言える。このように様々な教育用リソースが提供されている中、JF シドニーがオーストラリアンカリキュラムの内容に合わせて教材を開発し、「Classroom Resources」Web サイトで発信することが、Web サイトをより活性化させるための今後の課題である。そして、これがオーストラリア国内外を問わず、初中等教育機関において質の高い日本語教育を実現させる一助になることを願っている。

〔謝辞〕

当サイトの開発に関して、プロジェクトの企画を行った森文枝氏、現地教師の視点から教材整理作業を行った Katie Zarefos 氏、システム構築の実装を担当した角南北斗氏、3名のご尽力をいただいた。ここに記しお礼を申し上げたい。

〔注〕

⁽¹⁾ NALSAS で推奨された4つのアジア言語とは、中国語、日本語、インドネシア語、韓国語である。

⁽²⁾ 2013年10月28日に公表された「アジアの世紀におけるオーストラリア白書」(Australia in Asian Century) には2025年までのオーストラリアとアジア諸国についての指針が示され、日本語、ヒンディー語、中国語、インドネシア語、韓国語の5言語が学校教育において推奨されている。(中島 2014)。

⁽³⁾ 本稿で挙げたオーストラリア中等教育機関で使用されている日本語教科書は改訂が繰り返されている。教科書について、詳しくは「日本語教育国・地域別情報＜オーストラリア＞」(<http://www.jppe.go.jp/japanese/survey/country/2013/australia.html>) 学習環境のページを参照されたい。

⁽⁴⁾ 「オーストラリアンカリキュラム」の枠組みである「The Shape of the Australian Curriculum」は2009年に第1版が公表され、2012年までパブリックコンサルテーションを繰り返しながら改訂されている。最新版は、2012年10月に改訂された第4版である。

(http://www.acara.edu.au/verve/_resources/the_shape_of_the_australian_curriculum_v4.pdf)

⁽⁵⁾ 2014年11月現在、日本語のカリキュラム及び、他6ヵ国語のカリキュラム暫定版が公開されている。

(http://www.acara.edu.au/verve/_resources/20141015_Languages_-_Japanese_-_Validation_for_public_viewing_September_2014.pdf)

- ⁽⁶⁾ 開発1期の作業は、2010年3月から2013年3月まで JF シドニーの日本語専門家であった森文枝氏を中心に行われた。
- ⁽⁷⁾ 検索用タグとは、検索したいリソースがヒットするように、それぞれのリソースにつけられた目印のことである。
- ⁽⁸⁾ オーストラリアの学校教育において、初等教育段階は Primary、前期中等教育段階は Junior Secondary、後期中等教育段階は Senior Secondary と呼んでいる。
- ⁽⁹⁾ 「Classroom Resources」 Web サイトのアクセス解析は「Google Analytics」によって行っている。

〔参考文献〕

- 岸田理恵・キャシー ジョナック・赤羽三千江・信岡麻理・森文枝・中川康弘 (2012) 「日本語授業における ILL 理念の具現化に向けた取り組み—映画教材『しあわせ家族計画』を用いた教師研修の成果から—」『国際交流基金紀要』第8号、135-149、国際交流基金
- キャシー ジョナック・根岸ウッド日実子・松本剛次 (2008) 「オーストラリアの初中等教育における外国語教育の現在と国際交流基金シドニー日本文化センターの日本語教育支援—Intercultural Language Teaching and Learning の考え方を中心に—」『国際交流基金紀要』第4号、115-130、国際交流基金
- 中島豊 (2014) 「第1回全豪日本語教育シンポジウムの報告」『国際交流基金紀要』第10号、145-152
- 国際交流基金日本語国際センター「日本語教育国・地域別情報<オーストラリア>」
<<http://www.jpf.go.jp/j/japanese/survey/country/2013/australia.html>> (2014年8月25日参照)
- 国際交流基金 (2013) 『海外の日本語教育の現状 2012年度日本語教育機関調査より』くろしお出版
- Liddicoat, A., Papademetre, L., Scarino, A. & Kohler, M. (2003). Report on intercultural language learning Australian Government Department of Education, Science and Training.
<<http://www1.curriculum.edu.au/nalsas/pdf/intercultural.pdf>> (2014年8月25日参照)
- Ochi, H., Jonak, C. & Kim, H. (2014). Renewal!! The Japan Foundation, Sydney 'Classroom Resources' Website (全豪日本語教育シンポジウム発表資料),
<http://www.jpf-sydney.org/2014nsjle/NSJLE2014_Abstracts%20&%20Bios_FA.pdf> (2014年8月25日参照)